

---

# 地下国のゲーム

峰春秋人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

地下国のゲーム

### 【Nコード】

N4881V

### 【作者名】

峰春秋人

### 【あらすじ】

ハートの国のゲームに巻き込まれ、そして負けてしまったアリス。それを助けるために強制的に送り込まれた幼馴染、ハンプティー。

「貴様は一度、ワンダーワールドにいたのだからな。」

ナイトメアのこの一言、彼に見覚えがない。

アリスを助けるための【ボーナスゲーム】。

それは・・・本当の自分を明かさずに、アリスと同じゲームを受ける。

ただそれだけ・・・。

ゲームを進めていくことに気がつく、本当の自分の姿。

ハートの国のアリス映画化決定！ということ、ちよいと書いてみたBL?と思わせぶりの、夢小説です。

BLじゃないから、平気だよ。

## プロローグ

アリスが消えて早一年。

アリスの姉は命を絶たれてしまっただけから早一年。

「・・・暇だ。」

遊び相手のいなくなった俺には一日が退屈だった。

今日も庭先の木に上って空を見上げる。どこまでも真っ青な空は別世界に続いて見える。

アリスはあの空の中に消えたのかな？

「ダンプティー。」

あー、そうそう。アリスはいつも俺をダンプティーって呼んでいた。俺の名前はハンプティー・ライスト。おとぎ話のハンプティーダンプティーをなぞって、アリスの姉が俺に付けてくれたあだ名。でも、それが俺とアリスをつなぐ絆ってやつなのかもね。

「・・・帰ってきてよ、アリス。」

木の上で器用に寝返りを打って俺は目を閉じる。

夢はいいものだ。アリスや、アリスの姉がこの世にいたことを忘れさせてくれる。

このまま・・・覚めなければいいのに。

「ハンプティー。」

「・・・。」

「ハンプティー!!!」

真っ暗な闇の中、目を覚ました。  
何にも見えないのにそこに立っているのは紛れもなくアリスだった。  
相変わらず似合わないフリルのドレスを着ている。

「アリス？」

「久しぶり、ハンプティー。」

手を振って笑顔でこちらへ寄ってくる。

懐かしくて、思わず抱きしめてしまいたくなった。けど、ぐっとこらえて俺もあいさつする。

「久しぶり。今までどこ行ってたんだ？」

アリスの目が急に悲しげになって、歩みを止める。

夢にしてはそれはリアルで、現実といっても過言ではない。まあ、俺は夢と信じるけど。

4

「アリス、どうしたの？」

「・・・あのね、ハンプティー。私ね。」

アリスがうつむいて洋服をぎゅっとなつかむ。声はどこか湿っていて、嫌な予感がした。

言葉を出す前に一步、また一步アリスに近づいた。そして、アリスの小さな肩を掴んで抱きしめる。

冷たい、そうそれがまるで・・・死人のよう。

「ゲームに負けたの。」

「ゲーム？」

何を言ってるかさっぱりだった。

「ゲームって何？アリス、どういうこと？」

「・・・私はね、私はね・・・。」

アリスが顔を上げる。その顔はぐしゃぐしゃで、ぬれていた。

俺はあわてて自分のハンカチをポケットから取り出して、その涙をぬぐってやろうとした。

が、ことごとくアリスにそれをかわされた。いや、すり抜けてしまったというのが正しいのかな。

「あ、アリス!？」

「・・・死んじゃったの。」

その現実だけは夢であろうと、胸にひどく突っかかった。

夢ってこんなに怖かったっけ？でも、現実じゃないもんね。覚めてしまえば・・・。

「これは現実だ。」

「だ、だれだ!？」

アリスと俺以外の声に驚いて、周りを見回した。

けど、そこに当然のごとく誰もいやしない・・・。

「僕の名前はナイトメア。夢魔だよ。」

「夢魔？ナイトメア？なんだよ・・・。」

混乱する。平静を保つことが難しくなってきた、それでも泣いてい  
るアリスを放っておけない。

「君はアリスを生き返らせるためのボーナスステージに出れるんだ。」

「ボーナスステージ？」

そう呟いたとき。俺の真横に人の気配を感じれ、俺は振り向く。そこにいたのは銀色の髪をし、眼帯をつけた男が立っていた。驚いたものの、俺は動くことなく顔だけに驚きを張り付けた。

「ボーナスステージ。君がアリスに代わってゲームをする番だ。」

「なぜ、なぜ俺なんだ？他の奴でもいいはずだろ？」

「あなたじゃなきゃ・・・だめなの。ダンプティー。」

さっきまで俺の腕の中で泣いていたアリスが、俺の腕を離れて凜々し口調で言い放った。

俺じゃないといけないって・・・いったいどうということなんだ？

「とにかく、これは夢であって夢じゃないの！」

「現実ってこと？」

「現実とは違う。でもね、傷は残るし、痛みも感じる。何もかも感じるんだけど、現実じゃないの！」

アリスの言ってることを普通なら信じない。

けど、尋常じゃないアリスの口調に俺は動揺を隠すことに精いっぱいだった。

こんなにも取りみだして夢のことを語るってことは・・・現実？

「真実かウソかはお前が決めればいい。ただ、もうゲームは始まっている。」

「・・・俺がゲームに勝てば、アリスは生き返るのか？」

「ああ、そうだ。」

そう、今はそれだけ考える。

アリスは死んでいる。それを生き返らせるには……俺しかない  
と。

「ルールは？」

「知ってるはずだ。君なら。」

「はあ？」

ルールを知ってるはず？何言ってるんだ？俺は今ここに来たばかり  
なのに。

ナイトメアは不敵な笑みをこちらに向けてから、ゆっくりと距離を  
縮める。

「ハンプティイ・ライスト。貴様は一度、ワンダーワールドにいた  
のだからな。」

「はあ？何言ってるんだよ？ワンダーランドって、なんだよ!？」

「質問はあっちに着いてから、住民たちに聞くことだな。では……  
」

ナイトメアはアリスを連れて俺から遠ざかる。

そして、これから起こることを心の底から楽しむように笑った。

「検討を祈る。ハンプティイ・ダンプティイ。」

何故か名前とあだ名を融合されて、この夢にぴったりりの名前を完成  
させる。

そして、俺は落ちて行った。

そこというものを知らない闇の中に……いつまでも……いつ  
までも。



「っ痛!！」

背中がものすごく痛い。

ひどい目ざめだ。それに寒いぞ……。

あたりを見渡すとそこは、夢よりか明るい夜の世界が広がっていた。風が吹くとどんどん体温が下がっていく。とりあえず……。

「誰か人を探そう。」

そう思つて立ち上がった、そのとき。

……なんか違和感がある。足元は風通しがよく、頭はなぜか重い。え?え????

自分の視界に入ったのは、鏡。都合のいいことに俺の全身を映し出して、謎を解決してくれた。

「うわあああああああああああああ!！」

夜の見知らぬ街に俺の声が響き渡る。

けど、この服装は……あり得ない……。

俺の自慢だった黒髪は一変して、さっきの夢魔より輝く銀色の長い

髪になっている。

洋服もアリスがよく着ているフリルもので・・・まるでこれじゃ・・・。

「俺、女体化？」

嫌だったけど。

その現実を知るのが嫌だけど・・・。

失礼ながら自分のパンツの中をのぞく。パンツもご丁寧に女物とは・・・。  
案の定、うん、ない。

「う、ウソだろ・・・。」

ゲームに参加というよりも、なんだかこっちのほう怖いよ。

俺はへなへなと座り込んで若干すすり泣いた。

声も女っぽくてまるで、自分じゃないみたいだ。

「これからどうしよう・・・。」

目をこすつてとにかく周りを見渡そうとすると、手に腕輪みたいなのがついてるのに気がついた。

白色のブレスレットみたいなそれには【あと1年】と書かれたところがあつて、周りには何も書いてない。そして、裏にも何か書いてあつてどうやら名前らしい。

「ハンプティィー・ダンプティィー・・・俺かよ。」

「誰かいるのか？」

突如として現れた男の姿に心の底から驚いた。

思わずブレスレットを隠してしまったりもした。

「あ、あの……。」

「こんなところでなにしている!？」

「え、あ、その。俺……。」

藍色の綺麗な長い髪をしたその男は、ランプを片手に俺に近づいてくると乱暴に隠していたほうの腕を掴まれた。そして、ものすごい力で立たされる。

「此処はお前みたいなやつが勝手に入っていいところじゃないぞ！」

「え、だ、だから、俺は……。」

事情を話そうとすると、いつもなら動く口がもごもごと開きが悪くなる。

なかなかしゃべらない俺を睨みつける男。が、突然俺の腕にあったブレスレットを見て目を丸くさせる。

俺とブレスレットを交互に見つめると腕をぱつと離す。

「お前……ボーナスゲームの余所者か？」

「よ、余所者？」

聞きなれない小説に出てきそうな言葉に首をかしげた。が、すぐに【ボーナスステージ】という言葉に食いついて男に取っ組みかかった。

「し、知ってるの!？」

「おい、何をする!離せ。」

強引に手をはがされてすごい目つきで睨まれる。

軽く謝ってからもう一回尋ねた。

「ボーナスゲームのルール・・・知ってるのか？」

「ああ、知ってる。」

「教えてくれ！俺、全然知らないんだ！！」

俺は結構必死だった。

だって、ルールを知らなかったらこのゲームに負けてアリスは死んでしまう。

その男は眉をしかめて首をかしげる。

「何も知らないのか？」

「ああ。あの、夢魔は俺はワンダーランドにいたんだって・・・。」

また、男は眉をしかめた。

その理由は聞かなかった。聞きたくなかった・・・。

「で、ルールは？」

「此処は寒い。家に入ろう。」

「家？」

男はさつさと姿を現した階段のほうへ行こうとする。けど、俺は阻止するかのようにつかんだ。

ぎょっとした目で俺を見る。あ、俺っていま女なんだっけ・・・。

「あ、あのさ、名前。名前は？」

「そういうのは・・・自分から名乗るものだ。」

「俺は、ハンプティ・ライストだ。」

手を離すと男は落ち着いた表情に戻って、そして・・・。

「ユリウス＝モンレーだ。」

何故か胸が苦しくなった俺。あ、姿じゃなくて心までですか？  
うわ……どうしよう。

## プロローグ（後書き）

展開が早いのは表現が難しいからだw

## 第一話

「うわあああああ！！」

銃を向けられて、ましてや発砲されたのはこれが初めてだ。

「やめろ！！」

狂った双子にナイフで殺されそうになったのも、

「ぜ、ぜひ。」

夜のお茶会に誘われたのも、

「だああああ！！うるさい！！」

あんな不協和音を聞いたのもすべてすべて初めてだった。

「あれ？君は、余所者なの？」

その人は人が好きそうな顔をした赤い奴だった。

「・・・はい、そうですよ。」

ユリウスへのコーヒーを入れながら、勝手に台所にやってきたそいつに驚きながらもうなずいた。

その人はにっこりと笑って俺のいれたコーヒーカップを一つひったくっていく。

「あ、」と声をもらしたときにはもう、カップの淵にそいつの唇がついていた。

「んー、おいしくないね。」

「はあ？」

きっぱりしたそいつが俺は不快で仕方なかった。

そこへやってきたユリウスも眉をひそめて、どこかうんざりしたような声色で話す。

「そこで何をしてる？エース。」

「やあ、ユリウス。」

「ユリウス！俺のコーヒーうまくない!？」

ちよつとムキになって怒鳴った口調でユリウスに聞いてみた。

すると、ユリウスはちよつとひるんだ様子で戸惑い小さい声で・・・。

「ま、まずい・・・。」

「・・・マジかよ。」

なんかショックだった。



自分ではうまくできたつもりなんだけどな……。

「まあ、そんなことより……エース此処でなにしてる？」

「やだなあー、持ってきてあげたのに君がいないから。」

「だからって此処に入るな。」

ちよつと怒った口調でエースを台所から追い出す。

エースって人の手に握られた汚らしい袋から、がしゃがしゃと何か  
が触れ合っただけの音がした。

気になったけど、あんまし深追いはしないことにしてるから。放っ  
ておいた。

「あ、君の名前は？」

「え？」

いきなり振り向いたエースはにっこりとしたほほ笑みを張り付けて、  
尋ねる。

頭の中にボーナスゲームのルールが浮かんで出る。

【本名を明かしてはいけない】

「ハンプティー・ライストです。」

僕の本名はどうやら「ハンプティー・ダンプティー」というあだ名  
らしい。

プレスレットに書かれたその名前だけで俺は人生を左右されている。

「そっか。俺はエースだよ。」

「……うん、よろしく。」

手を差し出すからその手を握る。大きくて、暖かい手。

あ、俺の手小さいな。  
それも此処に来たせいなのかな？

「そうだ、ハンプティー。この後暇？」

「・・・ま、まあ。」

「なら、俺のところにこない？」

「え？」

俺のどこ？どこそれ？

視線を泳がせてみると、ユリウスとあっってしまった。

ユリウスが呆れた声で助け船を拾う。

「あいさつ回りでもしてこい。」

俺べつに引っ越してきたんじゃないけどな・・・まあ、いいや。

「一緒に行くよ。」

「よかった。じゃ、いこうか。」

エースは俺の手を取るとぐいっつと引っ張りながら走る。

手が痛くてちよっと声を上げる。けど、気にした様子はなくエースは走る。

まるで子供のようにね。

「バン！バン！」

一度目の銃声も、二度目の銃声も俺のそばで起こったものだった。耳をふさぐ俺の近くにいる、エースと銃を向ける黄色の兎耳の男。

「どうなってるんだよ！！！」

思わず空に向かって叫んだ。

そうじゃなきゃ、二人とも話を聞いてくれないし……俺が死んでしまう。

何故、こうなったかっていうと……さかのぼること3分前。

「エース、こっちでいいの？」

「うん。いつも此処を通っているから、大丈夫。」

時計塔を出てまだ3分もしないうちにエースは道を大きく外れて、草むらをかき分け始めた。

そこが近道と良い春のだが、そうは思えない。

「エース、待ってよ！」

スカートがさっきから枝に引っ張られて歩きにくい。ついには、

「ズデーン！」

豪快に転ぶ始末。

「エースはやつと俺がつらそうだというのに気がついたのか、急いで振り向いて手を貸してくれる。」

「でも、それがさ……。」

「これならいいよね？」

「お、おい！おろせ！！」

人生で味わうことのなかったお姫様だっこ。

「エースの腕の中で俺は暴れるのに、びくともしないことに少々ショックを受ける。」

「おろせつて！！」

「恥ずかしがることないよ。俺は男で君は女なんだから。」

「俺は男だ！！」

「嘘言つても無駄だよ。」

笑顔が眩しい。

「本当も嘘に返られてしまう。」

「ああ、めんどうだ。いやだ。」

「と思う俺の前にもっと面倒な事件が起きた。」

「あれ？ここ……お城じゃないな……。」

「はあ？」

「付いたのはお城というより屋敷らしき建物だった。」

「エースは俺を下ろさずに首だけをかしげて、独り言をつぶやき始める。」

「ここを抜けたらお城かな？」

「そ、そうなのか？」  
「うん。きつとそうだよ。」

頼りない言葉に異論できるはずもなく、そのまま運ばれそうになつたその時……。

エースの動きが止まって、カチツという聞きなれない音が聞こえた。視線を向けるとそこには黒い筒状のものがあつた。一瞬で銃口何て気がつくはずもなく、筒状のつながるほうへと視線を移動させた。手があつて、豪華な服があつて、顔立ちの良い男、そして……。

「う、兎？」

「エース。てめえー、またここでなににしてやがる？」

「やあ、ちよつと迷っちゃつてさ。」

「またか……。」

呆れた声を上げる兎はエースと話していて、俺のことなんか気にしてない。いや気が付いていない。

「え、エース。」

ちよつと不安になつて声を出すと、エースが不思議そうな瞳をこちらへ向けた。

目でどうしたの？と尋ねるこいつに俺は、

「おろせ。」

ただ淡々とした命令っぽいことを言った。けど、俺の考えは甘かつた。

「やだ。」

今までより明るい笑顔を張り付けて即答された。  
ちよつと傷つく。涙がにじむ。女だから・・・。

「おい、そいつ・・・余所者か？」  
「ど、どうも。」

やっと俺に気がついた黄色の兎が俺をのぞきこむ。  
手にはまだ銃があり、びっくりして思わずエースの胸元の洋服をつかんだ。

その瞬間、急に体が揺れるからより一層強く掴んでしまった。

「ちよつと、怖がつてるからやめてください。」

「はあ？」

「兎耳なんてこわいですよね？」

「え、じゅ、銃が。」

「そいつ、お前におびえてるんだろ？」

「つむ。」

エースはほほを膨らませて子供のようにくれた。でも、それだけならまだ幼稚で良いものだ。

だが、此処はそんな国なんかじゃない。

エースは腰にさしていた剣を取り出して変わりない顔で、黄色の兎につきつける。

「え、エース!？」

「つたく・・・おっぱじめるきか？」

「何言ってるの？ただのゲームじゃないか。」

ゲーム。剣をふざけて兎につきつけてるようには思えない。

俺は急に怖くなって無理にエースから降りようと、暴れ始めた。

「ちよ、あ、危ないですよ！」

エースが初めてあわてた。

けど、そのすきを突いて腕から転げ落ちる。すぐに逃げようとしたけど……。

あああ、銃口こっちにむけるな！！

「うわあああああああああ！！！」

頭を抱えてはい、悩みのポーズ。ってそうじゃない！！

守りの体制に入る俺を真ん中に二人は本当にゲームを始める気でした。

やめてえええええ。

「おい、エリオット。何をしている？」

そこに響く二人のものじゃない低い声。

天の救い？それとも悪魔のささやき？なんておとぎ話っぽいことを思っ上を仰ぐと……また男がいた。今度は帽子をかぶった男だった。

「ブラッド……。」

「騎士殿もすまない事をしたね。」

「いいや、かまわないよ。それより……。」

エースの視線が降りてきて俺。あ、今更ながら心配？

手を差し出して俺を立たせると「ごめん。」と小声で言ってから、ブラッドに向きなおる。

「彼、彼女にまで銃を向けたんだ。傷がついたらどうするのさ。」  
「き、傷って・・・俺は商品か何か!?」

突っ込まずには居られなかった。傷って・・・ひどいな。

ブラッドと呼ばれた帽子男は興味深げに俺を見つめる。その目が・・・  
すごく・・・。

「お前、いやらしいな・・・。」

「はあ!?!」

叫んだのは黄色兎・エリオットだったのはなぜかな？  
眉を寄せて結構怒ってるみたい。

「ブラッドがいやらしいだ?!?お前ブラッドはいやらしくなんか  
ないぞ!」

「え、いや、その・・・。人を見つめてくる目が・・・。」  
「いやらしいか?」

ブラッドの顔が身長の高い俺の視線まで下がってきていて、思わず  
後ろに飛び退く。

後ろのエースにぶつかるけど、ちょうどいいや。

すぐさま後ろに隠れて様子をうかがう。エリオットはいまだに俺を  
睨んでる。

「面白い子だ。余所者か?」

「そうだよ。時計塔にまた居候中だよ。」

「またか。あそこは人気だな。」

二人の奇妙な会話は知らないけど、またってなんだ?誰か時計塔に



でも住んでたのかな？  
とにかく、この状況から早く抜け出したい俺はエースに話を振りだす。

「エース、戻らなくていいのか？」

「え、あ、そうか。でも、もう少しくらい。」

「早く行こう！」

「え、そう？もー、ハンプティーはせつかちだなあ。」

のんきな俺には言われたくない。

ちよつとふくれっ面をして俺はエースの腕を子供のように引いた。  
すると、あの低い声が響く。

「お嬢さんは私のことを警戒しているようだね。」

「！」

「な！？ブラッドは良い奴だぞ！！！」

「……し、失礼いたします。」

軽く会釈をしてから、ぐいぐいとエースの手を引いてその場から退散した。

だって、あのブラッドっていうやつそっくりなんだ。

アリスの好きだった……俺の……俺の……。

「兄貴……。」

こんなことって……あり得るのかよ……。

第二話（前書き）

夢小説です

## 第二話

「その娘、お前はアリスの友人か？」

綺麗な赤い女性はエースの背に隠れる俺に尋ねかけた。

ひどく心まで小さくなってしまった俺は、ただ首を縦に振るだけだった。

「アリスの友人はわらわの友人。すぐにお茶会の準備を。」

手をたたくと外にあわただしく人が集まり、消えていく。

首をかしげているとエースが耳打ちする。

結構くすぐつたくて体が動いた。

「女王様は夕方のお茶会が好きなんだ。」

「・・・そっか。でも、俺お茶会とか好きじゃない。」

「大丈夫。ハンプティイは可愛いから。」

「ごめん、意味がわからない。」

冷やかな目でエースを見るめる。冗談めいた笑いを浮かべてエースは俺を外へと連れて行く。強引に。

「さて、お茶会をはじめよう。」

「あれ？ペーターさんはいないんですか？」

「ホワイトならもうすぐ来るだろう。」

女王様・ビバルディはさっそくお茶をすすり安らぎのひと時を味わう。

そこで視線と視線がぶつかった。始めにそらしたのは俺だった。

「お前はアリスより臆病ものなのか？」

「ち、違います！俺は……。」

「俺？……女の子が下品な言葉を使うな。」

「ご、ごめんなさい。」

「わかればよいのだ。」

綺麗な笑顔を浮かべてビバルディは言う。またお茶をすすった。

「そつだ、俺はいま女の姿をしているのだ。元は男！といっても無駄。そうユリウスが言つてたな。」

「仕方ない……女口調で接するか……。」

「び、ビバルディ女王様。ホワイトとは誰なのですか？」

「ビバルディでよい。」

ティーカップを置いて少しだけ不貞腐れた顔で溜息をつく。

「この人のへそを曲げたら大変だな。」

「ホワイトはアリスを此処に連れてきた張本人だ。」

「え、そうなのか！？」

「むむ？」

「え、あ、そうなのですか？」

「すぐさま言い直してにっこりと笑う。」

「アリスを無理やり此処に連れてきた。そして、ゲームに参加させたのだ。」

「ゲーム……。そのおかげで……アリスは……。」

「むかつく。その理不尽極まりないホワイトってやつが……。」

もし会ったら、もし会ったら。

「ぶっとばしてやる!」

「なに?」

「僕に何かようですか?」

別の声。

なんか嫌な気配を感じて振り向くと、兔耳が生えた白い眼鏡の男が立っていた。

「うわあああああ!」

机をがたがたと下品な音を立てて俺は席を立ちあがった。

予想はついた。この白ウサギこそが……。

「この、ペーター!! ホワイトに何か用ですか?」

もう一度につこりと笑った白ウサギは俺の腕を強引につかみ取ると、手繰り寄せる。

そして、意地悪そうな笑みを浮かべてダンスを踊るように腰に手を。

「ちょっと、ペーターさん離してくださいよ。」

「エース、なんで貴方が彼女と?」

「もー、展開が早すぎますよ。」

二つの笑顔が怖すぎて、俺までひきつった顔になってしまっ。

ホワイトはぎゅっと俺の手首をつかみっぱなしで、エースは俺の反対の手首をつかむし……あの、男に取り愛されてもうれしくないんですけど……。

どうせなら、ビバルデイがいいです。

「お前ら、首をはねられたれたいか？」

あ、前言撤回。

ホワイトもエースも手を離してくれた。エースのほうはその後席まで連れてくのにもまた手をつないだけど……。

「貴方、アリスの友達なんですよ？アリス、元気ですか？」

無邪気な子供。

そう思ったけど、別に口にする必要はなかった。

俺はうつむき加減で口をつぐむ。そして、きつとした目つきでホワイトを睨みつけた。

「あんたが此処に無理に連れてきたおかげで、アリスは死んだよ。」

「!?!」

息を吸わずに早口で俺は結論を述べると、ティーカップのなかで冷めた紅茶を飲みほした。

ホワイトのしどろもどろな口元。ビバルデイのショックそうな顔。

そして、エースの変わらない笑顔。

すべてすべてしているんな意味で矛盾をしている。

なぜ、アリスが此処からいなくなったことを誰も知らない？ゲームが終わるまで此処から出れない。それを知ってるのに、何故!？

「ねえ、ハンプティー。」

エースがひそひそ声でまた耳元で囁く。

「ハンプティーはアリスの救世主なの？」

「・・・そうだよ。」

「そっか、じゃ・・・ボーナスゲームの参加者なの？」

「!？」

心臓が大きく波打つ。

エースの変わらない笑顔が恐怖へと変わり・・・そして・・・。

「なんで知ってるの？」

「なんとなくだよ。俺の勘はよく当たるから。」

思わず腕輪をぎゅっとつかんで後ろに隠す。

それに気がついてエースはにっこりと笑い、俺の耳元でささやく。

「大丈夫。ハンプティーはすぐに死なせない。」

「すぐ？」

「うん、だって・・・ボーナスゲームは面白くなきゃ。でしょ？」

誰に同意を求めているのかもわからぬまま、俺は目をそらしていつの間にか注がれた二杯目の紅茶を口にした。エースは席からたちがると、ビバルディに笑顔を向ける。

「じゃ、俺は別の用事があるので。」

「またか？」

「ええ、それじゃ。」

エースは別件の仕事があるのだろうか？

そういえば・・・ユリウスのとこに何か持ってきてたよね？あれのことか？

「貴方はアリスの友達ですか？」  
「うわああああ!!」

本日何度目かの悲鳴を上げて俺は席を離れる。  
隣にはいつの間にか白兔がいて、こちらをにこにこした笑顔で見つめてる。

「ち、近づくな!!」

「なぜです？僕は貴方に直接的に何もしてません。」

「間接的にいろいろしてる。」

「そうなんですか？」

すつとぼける顔も、あの白い耳もすべて・・・消える!

「ホワイト。大事な客人をいじめるな!」

ピシヤリとビバルデイの声が響く。

ホワイトがそつと俺から離れると、不貞腐れた表情でお茶の中を見つめた。

「大丈夫か？ハンプティー。」

「え、ええ。大丈夫です。」

にっこりと笑って一個席を空けて座りなおすと、紅茶をすする。  
ビバルデイは俺を見てその赤い唇を動かした。

「お前は何故、この世界に来たのだ？」

「え、それは・・・。」

「ん？どうした？」



あまり話していいことなのか分からない。  
もし、これで俺の命が狙われたら大変だから……黙って……。

「ボーナスゲームですね。」  
「え？」

ホワイトの声が聞こえてまた、腕輪をぎゅっと握ってしまった。  
さっきのお返しと言わんばかりの笑顔で俺を見ると何事もなかったように、紅茶をすすする。  
俺はやっぱりこいつが嫌いだ。

「ボーナスゲームか……。それならアリスとは血縁関係か？」  
「い、いえ……。幼馴染です。ただの。」

俺はちよつとうつむく。  
アリスが好きだ。だから、恋人とか言いたいけど……。  
アリスは兄貴が好きだから……。俺じゃないから……。  
その瞬間、周りがいきなり夜になった。

「え……。ナニコレ。」

思わずかたことになる。

ビバルデイの盛大な溜息とともに、優しい声がかかる。

「さて、お茶会もお開きじゃ。ハンプティー。今日は泊っていくと  
よい。」

「え、いや……。帰るよ。」

「何故じゃ？」

「今日は少しユリウスと話があるし……。」

良いこじつけはないがこう言っておけば……。

「ユリウスですって!?!」

「え?」

「あの時計屋のところにもた余所者が住んでるんですか!?!ずるい  
です!?!」

「……帰ります。」

「待て、ハンプティー。夜道は危険じゃ。ホワイトをつき添わせる。  
」

「げえ……。」

思わず本音が擬音化して出てくる。

ホワイトの笑顔がこちらに向いて、ピンと耳が伸びる。喜び?

「あからさまに嫌な顔しないでください!」

「お前のこと……信頼してないから。」

「むう!」

「半径3メートル以内に入るなよ。」

「じゃ、この姿ならいいでしょ?」

効果音をつけるならポンっという音が適当だろう。

煙もそのくらい上がって現れたのは、小さな服を着た白ウサギだっ  
た。

「これならいいでしょ?」

「……悪い、私はそういう類のものは好きじゃないの。」

「えええ!?!」

「さっきと同じだ。」

「アリスは好きだって言ったのに……。」

兎バージョンの不貞腐れ顔はさつきとは違い少しだけ愛らしい。  
アリスが・・・好き。その言葉がちよっと心に響く。  
こいつは似てるのかな？俺に・・・。

「・・・その姿なら、いいよ。」

「え？」

「おいで。」

そつと兎を抱き上げて、俺は軽くビバルディに会釈すると城を出て  
いった。

夜道を白ウサギと俺は歩く。似た者同士が寄り添って。

「ハンプティーは僕のこと好きなんですか!？」

「・・・黙ってる。」

## 第二話（後書き）

今回はハートの国を中心に。

ホワイトは好きなような、嫌いなような・・・。  
展開が毎度早いような・・・いつかw

### 第三話

夜道を本物のかわいらしい兎に変身したホワイトと俺は歩いていた。足音しか響かない不気味な森の中を。

「ハンプティーはアリスのためにここへ？」

「そうだよ。あんたのせいで死んだアリスを生き返らせるために。」

夜道で最初に話かけてきたのはホワイト。

ちよつと悲しそうに、遠慮がちに尋ねられたけど、どつどつと真実をつきつけた。

今更悲しんでる余裕なんてない。

「貴方は勘違いしていますよ。」

「はあ？」

「僕はアリスを殺してませんよ。」

「・・・あのな、此処に連れてきたのはお前であってほかの誰でもない。」

「はい・・・。」

何もわかっていない表情の兎。

きつと人型だったらすぐに殴って走り去るところだけど、今は状況が違う。

一度深呼吸をしてから俺は簡潔な結論を述べた。

「お前が此処に連れてこなければ、死ななかつた。」

「・・・そうでしょうか？」

やはりこの兎は一回殴ったほうが・・・。

「僕が此処に連れてきたのではなく、アリスが望んでいたんです。」  
「アリスが？」

俺はアリスのことを小さい時から見てきた。

だから、この世界に来たがるはずがないと確信していたのに・・・  
それは違う？

ちよつと兎を抱く手に力がこもる。

「知らなかつたんですか？」

「・・・アリスは死んでる。聞くことはできない。」

「なら、僕が教えましょう。」

「・・・頼む。」

初めてこの国のものに何かを頼んだ。そんな気がした。

ホワイトが少しだけ体を動かしてから、咳払いをして話し始めた。

「まず、この国のすべてはアリスが好きなものが固められているのです。遊園地も、ハートの国も、帽子屋も、みんなのあの衣装などもすべてがアリスが望んだものなのです。」

「アリスが望んだ？」

「そう。口に出さず、心から望んでいるもの。彼女自身も気が付いていないかもしれませんが・・・。まあ、そういうことです。」

「ってことは・・・此処にいるお前らみたいな存在もか？」

「そうです。僕も、女王様も、エースもすべてすべてアリスが望んでいたものなのです。だから、僕らはアリスのことが好きなんです。アリスを知れば知るほど好きになるんです。」

この世界とアリスのつながり。

そんなものがあつた。アリスは望んでいた。この国を・・・。

ホワイトの口からさっきの俺と同じように簡潔に、結論が述べられた。

「アリスは求められることを望んでいたんです。」

「求められること……。」

「愛されたい。そう、心のどこかで思っていたんですよ。」

「……。」

黙るしかない。

俺はさっきも言ったように幼い時からアリスのそばにいたのになぜ・

・こんなことまで気がつかないのか。どうして？

「どうして……。」

「それは、仕方ないですよ。たとえ貴方がアリスとどんな関係であらうと秘密だったでしょうから。」

「そっか……。」

「貴方にも秘密はあったでしょ？」

「ないよ。」

「ありました!」

「ないってば。」

あっちがムキになるからこっちまでムキになってしまった。

ホワイトは俺の腕から抜け出すと地面に降り立ち、人間の姿へと戻る。

ちよっとイラっとして「近寄るな!」と言おうと思ったら、ホワイトの腕が伸びてきて俺の腕を軽く掴むと近くの木に押し付けた。

「な、何するんだよ!」

「秘密がありました!」

なんかすごい怒ってる……。何故？俺なんかしたか？

「はぁ？」

「貴方は隠していたじゃないですか。」

「何が！？」

何を言いたいのが見当だって付かない。

ホワイトは少しあきれたように深く深呼吸をすると、俺がわからなく一番疑問に思っていたことを口にした。

「貴方がこの住人だったことを！」

「……。俺が……。このの？」

やばい……。気が遠くなる。

俺、此処に住んでたのか？悪いが意味がわからない……。  
……。あれ？本当に意味がわか（ ）

「ハンプティー！！」

・ハンプティー！！

呼ばれても違和感がない。

薄々気がついていただけ、信じたくなかった。

そう、俺は-。

「すまん、状況がよくわからない。」

「そうかい？」

「そうだ。」



此処は夢の中。

俺がこのゲームに参加する前にいたあの夢魔のいるところ。

「おい、どうなってんだ？」

「どうとは？」

「いや・・・俺が此処に住んでいたとか。」

「ああ、それはな。」

ニコニコする夢魔・ナイトメアに俺はどこか苛立ち胸ぐらをつかみそうになる。

けど、俺には今そこまでの力があるとは思えないからやめておく。

「お前がこのゲームを進めれば進めるほど・・・わかっていくことだ。」

にっこりと笑みを張り付けられてもよくわからない。

苛立ち交じりの声でたずねる。それは自分に向けていったのかも知れない。

「俺は・・・誰なんだ？」

わからない。

こうまで混乱しているのに、焦りつてもものは一切見当たらない。

俺はひとまずその場に座り込んで何も考えないようにした。

「すぐ、思い出す。」

「・・・俺は知りたい。自分が誰なのか？いますぐに。」

「なら、此処の住民と多く接することだ。とくにユリウスとゴーランドという男にだ。」

「ユリウス？俺と関係を。」

俺がナイトメアに聞き寄ろうとすると、優しく冷たい人差し指を唇に押し付けられた。

冷たいそれは病人の手に似ていた。

「ゲームを進めればわかる。」

そして、俺は深い眠りについた。

このままやっぱ目覚めなければいい。

わかってしまったらきつと俺は負けだ。でも、わからないとアリスは死ぬ。それこそ負けだ。

どっちに転がっても負けならば・・・何もしないほうが。

「ハンプティー!!!」

「・・・ユリウス？」

目の前で心配そうな面持ちのユリウスが一生懸命俺の名前を呼んでいた。

眠気眼をこすってユリウスの顔を再度確認する。隣には真っ赤な姿の人がいて、エースだと分かった。

少しだけ安心したような息を吐いてユリウスがいつもの表情に戻る。

「まったく、何故あんなところで倒れていた!？」

「・・・へ？」

「とぼけるな!」

「いや・・・倒れたって？」

本気で首をかしげている俺にエースが優しくにユリウスをなだめる。

「きつと、ペーターさんが入口のどこまで運んでくれたんですよ。」  
「ったく・・・なぜ中に入れない。風邪をひいたらどうするつもりだったんだ。」

ぶつぶつと文句を言うユリウス。  
俺のことを心配していたんだと実感した。

「ユリウス。」

「ん？」

「温かいコーヒーでも淹れようか。」

精一杯のありがとこの気持ちを込めて俺は笑った。

エースと一緒に笑ってそばに来てくれ、ユリウスはあきれた面持ちで俺の頭をなでた。

幸せだ。それでいて、どこかなつかしい。

- 知りたい。

( ああ、知りたい。 )

- ゲームをしよう。

( そうだな。ゲームを進めよう。そうすれば )

- 君が誰かわかるはずだから

「へっくしゅん！」

「や、やっぱり風邪をひいたじゃないか！」

「はははははは。」

## 第四話（前書き）

フィクションです

## 第四話

ぽつり、ぽつり。

壁に張りつく雨。思わず窓を通して外を眺める。

「雨、降るんだ……。」「

ここでは雨が降らないと言われても不思議じゃないから。

ユリウスが眼鏡を直して資料に目を通しながら、俺に答えを返す。

「雨の日は嫌いだ。」「

まあ、それは俺も同じだ。

けど……。

「外にでも行ってこようかな?」「

窓の外をうつろ気に眺めていたら、そんな気分になった。  
ユリウスが俺をみて何か言いたそうに口をくぐもらせる。

「え、どうしたの?」「

気になって尋ねてみたら、ユリウスは首を振った。

「雨の日に外に出ようという気がよく起きるものだ。」「

「そうだよな。まあ、なんとなくなることだ。」「

そういうと俺は近くにあった傘を手にとって外へと駆け出した。

「夜までには帰るよ！」  
「……いつてらっしやい。」

夜なんていつ来るかわからないのに。  
俺はどこに行くでもなく、外へと出て傘をさす。女の子みたいな傘を。

雨が降って、激しくなつて、洋服が濡れて、雨宿りをしてたら、

「あ、あんたは……。」

黄色い兎さんに出会った。

「えっと、エリオットだっけ？」

「お、よく覚えてたな。あんたはブラッドのことを悪く言ってたから覚えてる。」

エリオットが少しほほを膨らませてそっぽを向く。

ブラッド、なんであんなにも兄貴に似てるんだか……。

俺は傘で自分の顔を隠した。訳が分からなくなればなるほど、傘で顔を隠す。いつもの癖だ。

「おい、落ち込んだか？」

エリオットが耳を垂らして心配そうに下からのぞきこんだ。  
それが、あまりにも唐突でびっくりした。

「い、いや、ちよつと考え事。」

「ふーん、てか、雨の日にまで外に出るのか？」

「そつちこそ。雨の日まで御苦労さま。」

皮肉気に俺が言つとエリオットはまたふくれつっつらでそっぽを向く。  
雨はひどさをましていく。風までも強くなりそうだ。

「そついえば、お前つてなんで此処に来たんだ？」

「・・・さあ、なんでかな。」

「はあ？」

俺だつてよく来た理由は知らない。

急に、そう急に、俺はここに来たから。

「なんで此処にいるのか知らないのか？」

「・・・アリスのため。」

「え、今何て？」

エリオットの声色が変わつた。

けど、何の違和感だつて感じない。だつて、アリスは実際に此処で  
暮らしていたんだ。

愛すべきアリス様は急に死を迎え、代わりに俺が来て・・・。

「お前ボーナスゲームの参加者なのか？」

「そのつもりだけど、なんのために此処にいるのかわからない。」

「アリスを助けるためじゃないのか？」



「……最初はそう思ってたけど、」

言葉を止めてまた傘で顔を隠す。

今度は覗き込んでこなかった。

だから、言葉の続きを雨の音の中にそつと含ませた。

「今はわからない。」

その結論に特に何かを感じたわけでもなくエリオットは静かにうなずいた。

「さて、どうしようかな？」

話を切り替えるように言ってみると、エリオットが子供のようになう。

「じゃ、帽子屋に来る？」

「お、いいの？」

抵抗とかない。

兄貴にそっくりのあのブラッドという男。

何か意味があると俺は信じてるから、さて、行くところかな。

「じゃ、走ろうか。」

「え？」

答えを返す前に手を引っ張られていく。

傘が落ちそうになるけど、がんばって耐える。

「ちよ、待ってよエリオットー！」

エリオットはなぜか子供のように笑っていた。  
それがおかしくて俺も笑ってみる。

「や、やっぱり無謀だったかな？」

ずぶぬれの洋服を見てちよつと申し訳なさそうな顔をするエリオット。  
ト。

耳を下に下げて俺と目を合わせようとしない。  
そこまで、傷つくことだったのか……。

「だ、大丈夫だよ。楽しかったし。」

「そう？なら、いいんだけど……。」

「それより、タオル……借りてもいい？」

「あ、うん！」

エリオットは慌ててどこかの部屋へと入って行ってしまった。

一人玄関に残された俺はふいに周りを見渡す。

豪華な造りの洋館の玄関は漫画とかによく出てくる感じの階段が大きくある。

「結構広いな……。」

思わず呟いてから、近くのピアノに視線を落とす。  
少しだけ埃の乗っているところから誰も弾いていないのだろう。  
そのふたを開けて白黒の鍵盤へと指を這わせてみる。  
ポロンポロンとなるピアノの音は透き通っていてきれだったから、  
思わず、

- 咲いた咲いたチューリップの花が  
並んだ並んだ赤、白、黄色

なんでこの曲にしたかった？  
アリスが好きだったにきまつてるだろ。

「良い音色だな。」

いきなり聞こえた声に驚いて音はずしてしまっ  
た。上を見上げると・・・

「ぶ、らつど・・・。」

「ほう、名前を覚えていたか。」

階段を一段、また一段と降りてくるブラッド。  
すごく怖い。いやだ、兄貴が・・・。

「あ、ブラッド。おかえり。」

タオルを片手にやっとエリオットがやってくる。  
きつとほんの数分のことだったと思う。  
けど、兄貴が・・・ブラッドが来た途端に時間が早く鼓動とともに  
早くなった。

「エリオット、雨の中走ってきたのか？」

「うん、早く帰ろうと思って……。少し失敗したけど。」

「そうか。なら、暖かいお茶でも彼女に召し上がってもらおう。」

そつと口元を釣り上げるブラッドが俺のことをちらりと見る。

ちよつとした仕草が、言動が、兄貴とそっくりだから鳥肌が立つ。

「おう。ほら、ハンプティー。」

タオルを差し出しながらエリオットが「行こう。」と付け加える。

ここで断るのもなんだから一応そのタオルを受け取った。

これでもか！ってほどの大きいテーブルに腰かけて、目の前に出されたお茶をそつとすする。

「なあ、ブラッド。」

「ん？どうかしたのかい、お嬢さん。」

少しためらい気味に俺は尋ねることにした。

白ウサギが言った「此処の住人だった。」という話を。

「おれ……。私は、此処の住人だったのか？」

「……。さあ、私は君みたいな住人は知らないな。」

少しの間をおいて、ブラッドの視線がそらされる。

「正直に言ってくれ。俺に似た奴でも、そうじゃない奴でもいい。」

「知らないといっている。」

「時計塔にアリスと俺以外にだれかが住んでいたはずだ。そうだろう？」

「知らない。」

「・・・なんで、隠すの？」

「隠してない。知らないのだ。」

断固としてしゃべろうとしないブラッド。

ああ、そういうこと。

「もしかして、思い当たるけど・・・思い出したくないとか？」

「・・・。」

「ブラッドと仲が良かったけど死んじゃったとか？地上に戻ったとか？」

「ハンプティー。」

急にエリオットの声が聞こえてくる。

垂れ下った耳と悲しげな瞳で俺のことを見つめてきた。

自分が踏み込んではいけない領域に入ったのだと感じた。

「・・・ごめん。」

自分は部外者だ。

だから、知りたくても知ることなんてできない。

「知りたければ・・・遊園地へ行け。」

「え？」

ブラッドに目をやるとお茶をすすっていた。

遊園地。まだこの世界に着いてから一回も行ったことがない。行ってみる価値はある。

「わかった。ありがとう、ブラッド。」

「今から行くのか？」

「うん、時間がないからね。」

俺は席を離れて玄関へと向かう。  
すると、誰かが椅子を引く音が音がした。

「私が送るとしよう。」

「え、ブラッドが？」

エリオットの言葉とともにブラッドが視界に入る。

何故？そんな言葉は不要なほどにブラッドは口元を釣り上げていた。

「さて、行くとしようか。」

「……ああ。」

こうして俺はブラッドとともに遊園地へと向か宇野であった。  
雨の遊園地へと。

## 第四話（後書き）

結構短い？

第五話（前書き）

遅くなりました



## 第五話

雨はやんでいた。てか、もう夜だった。

やけに静かな森でブラッドと二人というのは奇妙な気分になる。

「静かだな。」

俺が話を投げてても応答もしてくれない。

あー、兄貴みたいでうざいぞこいつ。

「な、なあ、さっきは悪かった。踏み込んだりいけない領域に入  
て。」

「踏み込んではいけない？そう、自分で思ったのか……。」

ブラッドの冷たい視線が俺を見下ろす。

寒い。そして、怖い。

「ああ、だって、エリオットがあんな顔をしてたから……。」

「……一ついいことを教えてやる。」

歩みを止めてからブラッドは俺のことを睨みつけるように見る。

怒ってるようにも、悲しんでいるようにもとらえられる表情。

ああ、きつと良くないことを言われるんだと感じた。

「すぐにポーンナスゲームを終えてこの国から出ていけ。」

やっぱり、よくないことだ。

俺だって出れるならこの国を出たい。

が、アリスの命がかかっているのだ……出るわけにはいかない。

「・・・できることならそうする。」

「できることなら?」

「アリスを生き返らせるまでは帰れない。」

「アリスを?」

意外な反応だった。

彼はそんなことは初耳だと言わんばかりに不可思議な顔を張り付ける。

俺は再び歩き始めながら説明した。

「そつだ、アリスが死んだから俺が来たんだ。」

「何故?」

「ボーナゲームで生き返らせるために。」

「何言ってるんだ?」

話の内容がかみ合わなくて思わずまた歩くのをやめた。

「どういうことだ?」

「ボーナゲームで人の命を救うことはできない。」

「・・・何言ってるんだよ?」

「アリスはもう死んだ。」

「黙れ!」

胸が苦しい。

怒りと、悲しみと、苦しみをすべてブラッドにぶつけた。

何も言ってこないのをいいことにブラッドの胸をこれでもかと叩く。でも、何故か自然と涙が頬を滑り落ちた。

「泣いているのか?」

「うるさい！」

認めたくないと思っても、本当の俺は認めている。

アリスが死んだあの日に飽きるほど泣いたのにまた泣いている。

「ナイトメアが言ったのか？」

「夢の中にアリスもいた。アリスが俺を此処に連れてきたんだ。」

「そのアリスは・・・ナイトメアの幻覚だ。」

「なに！？」

「ナイトメアはアリスを愛していた。きっと、お前を恨んでいたんだろう。」

ブラッドの言葉にまた胸が締め付けられる。

が、一つだけ疑問ができた。

「・・・ナイトメアが何故俺を恨む？」

「・・・それは・・・」

「ブラッド！！」

大声をあげてやってくる影。

ブラッドはそれを見るとやれやれといった様子で溜息をついた。

「私はお暇するでしょう。話を聞きたかったらメリーに聞け。」

「メリー？」

「今向かってくるあいつのことだ。」

指を差されたほうを見ると黄色い物体がこちらへと向かってきている。

ああ、影の持ち主か。

俺は振りかえってお礼を言おうとしたら、もうブラッドの姿はな

った。

「あ、あいつまた逃げやがったな！」

「あの、メリーさ。」

「ああ？」

いかつくて怖い声に思わず縮こまる。

すると、一瞬だけだが男の顔が懐かしいものを見るような、さみしそうな顔をした。

「あ、あの……。」

「おっと、すまない。急に怒ってしまって。」

「いえ、メリーって貴方の名前じゃないんですか？」

「あってるが、俺の名前はメリー＝ゴーランドだ。」

名前を聞いてもピンとこないっていうのが真実。  
むしろすごい名前だ。

「おかしな名前だろ？」

そう言われるとうなずきたくなる。

けど、此処は違う言葉を言うべきだろう。

「メルヘンチックですね。」

メリーは一瞬驚いたあと、また、懐かしそうな悲しそうな顔をした。  
でも、すぐに笑ってから言葉を紡ぐ。

「ありがとうな。」

とても優しい人だっってわかった。

「ゴーランド、俺まだここには来たことなくて・・・。」

「ああ、わかっている。ポーナスゲームの参加者だろ？」

「うん。で、そのポーナスゲームについても話が見たいんだ。」

「俺が答えられることならいいぞ。」

「ありがとう。」

「とにかく、此処は寒いから中へ来い。」

メリーは俺の手を引っ張って少し趣味の悪い遊園地へと連れて行った。

彼の懐かしそうな顔と自分が関わっていることを俺はこの後知るはめになる。

さつきも飲んだような紅茶が俺の胃袋に再びおさまる。

「やあー、できることなら私のバイオリンの音色を聞かせてやりたいよ。」

「バイオリンが弾けるの？」

メリーが自分のティーカップにお茶を注ぎ足しながら話してくれる。

「大好きなバイオリンを弾いているときはとても楽しい！」

「ぜひ、聞かせてもらいたかったな。」

「今度来た時に聞かせてやる。」

結構うれしそうな笑みを浮かべてメリーが言うものだから、俺も一緒に笑ってしまう。

メリーが椅子につき再びお茶を飲むと俺のことをまっすぐに見て、尋ねた。

「で、聞きたいことってなんだ？」

「あ、そうだ。なあ、ゴーランド。」

「なんだ？」

ブラッドが言っていた。  
ナイトメアが俺を恨む理由をメリーは知っている。なら、あの事も知ってるはずだ。

「ここにいた、俺とアリス以外の住人について聞きたい。」

「・・・誰に聞いた？」

メリーの声のトーンが低くなっていく。  
驚いて言葉を詰まらせた。

「怒る気はない。ただ、誰に聞いたか知りたいだけだ。」

「・・・みんながまた時計塔に住むのか。って言っていたから。もしかしたら・・・って。」

「そうか、わかった。」

メリーは席を立ちあがって俺の横までやってきた。

そして、膝をつけてしゃがみ俺の頭をそっと優しくなでた。

「ご、ゴーランド？」

「今から教えることにお前が傷つくかもしれない。それでも、聞く

か？」

「え、ど、どういこと？」

「どうなんだ？」

「・・・聞く。」

俺は頭の上に乗っていたゴーランドの手を強く握り、うなずいた。

「わかった。」

近くの椅子の再び座りなおしてから言葉を紡ぐ。

ワンダーランドに生まれた一人の人間の話を。

- 昔々、時計塔に一人の小さな女の子が倒れていました。

時計塔の持ち主であるユリウスはその女の子を仕方なく育てることになりました。

女の子はすすくと育ち、ワンダーランドの住人は彼女が大好きになりました。

ある日、女の子の16歳の誕生日の日に三つの領土のものが集まって彼女をお祝いしました。

毎日が楽しいと思える日々。

けど、ある日アリスが時計塔に帰りませんでした。

何日も、何日も・・・。

みんなはそれを知って心配になり探し始めました。

すると、森の奥深くで眠りにつくように倒れていた彼女を見つけました。

息をしていない。でも、眠ってるようで・・・信じがたいことでした。

その日を境に三つの領土はまた対立を始めました。

その後ずっとずっと領土が仲良くなることはありませんでした・・・。

「ってはないだ。」

「・・・俺が何故傷つくんだ？」

「・・・少女の名前は・・・。」

・ハンプティー・ダンプティー

時が止まってしまふ。

心臓だけが動きを止めることなく。むしろ、さっきよりも早く動いている。

メリーは「おい。」って言ってる口が見えた。でも、全然聞こえない。

真っ白な世界が広がって・・・そして、落ちていった。



## 第六話

真つ暗な闇の中でナイトメアは幻覚のアリスの頭をなでる。

「ナイトメア様、お客様です。」

「ハンプティー・ライストのことかい？」

「ええ、そうです。」

執事のトカゲことグレイリングマークは軽く頭をさげた。

ナイトメアは少しだけ不機嫌そうな顔をしてから、幻覚を闇の中に返す。

そして、イスから立ち上がった。

「さて、彼の文句の一つでも聞こうかな？」

笑みを張り付けて闇の奥へと消えようとする。

「ナイトメア様、何をそんなに楽しんでおられるのですか？」

トカゲの一言にナイトメアは歩みを止めて振り返った。

そして、口にした言葉は夢魔には持ってつけの言葉であった。

「あいつの苦しむ顔が見れるからだ。」

闇に完全に解け込んだナイトメアをずっと見つめるようにトカゲは、動かなかった。

ただそれは怒りを抑えるために止まっているようにも見えた。

「ナイトメア……。」

予想通り俺の前に現れたナイトメアは笑っていた。  
俺をだましたことを少しも反省せずに。  
さすがは夢魔だ。

「何故、騙した？」

「お前に教えることはない。」

「俺への恨みか？」

「何故、お前に恨みなど？」

疑問に疑問で返す。

俺に対するナイトメアの恨み。ブラッドが言っていた、

「ナイトメアはアリスが好きだった。」

そして、俺の腕輪と同じ名前の持ち主・ハンプティー・ダンプティ  
！。

この三つが関係していることは間違いないけど……どう、つながっ  
てるんだ？

でも、一つだけはわかる。

「どうした？」

「お前は俺と一緒に。」

「なんだと？」

「アリスのことが好きっていうところだ。」

ナイトメアの顔が少しばかりゆがんだ。

「俺はアリスを愛している。だから、お前の嘘に騙されてまでこの世界にいるんだ。」

「だまれ……。」

「お前だって同じだ。俺と一緒にアリスが死んだことを認めようとしな。」

「うるさい……。」

「ブラッドも、俺の兄貴も言ってた。アリスは……。」

・もう、いない。

「うるさい……!!」

ナイトメアの怒りの叫びが夢の中に波紋をつくる。

それは紫色の火へと変化して俺に襲いかかってきた。熱い、とって  
も熱い。

夢なのに痛いつて感じる。

「ナイトメア様！」

急に現れた男によって火は消えて、暑さから解放される。

そして、男は俺とナイトメアの間挟まり守るような体制で言葉を  
口にした。

「ナイトメア様、もうおやめください！」

「どけ！トカゲ……！」

トカゲと呼ばれたその男の人は怒り狂うナイトメアをなだめようと叫ぶ。

「こんなことをしても、何もおきません！」

「うるさい！黙れ、トカゲ！！」

「黙りません！！彼もあなたも同じ人間だ！！」

「違う！私は夢魔だ！！人間みたいにやわな生き物じゃない！」

怒鳴り合う二人が一体どういう関係なのかは分からないが、ただ俺は感じた。

目の前に立つトカゲと言われた男に見覚えがあることを。

「トカゲ、お前は下がれ。」

「嫌です。彼女を傷つけることは許しません。」

「お前は騙されていたんだぞ！そいつに遊ばれただけなんだぞ！！」

鋭く刺さるナイトメアの指先は俺に向かっていく。

目の前の男が悲しげな顔をしてから首を一生懸命に横へ振った。

「違います！」

俺の頭の中で何かが通り過ぎた。

目の前の男が俺に笑いかけてきて何かを話してくる。

そこへやってくるユリウスを見ると急に悲しそうな顔をしてしまう。

「ぐ、れい……。」「

「ど、どうしました！？」「

驚きを声に含ませてトカゲがこちらを見る。

少しだけ心配そうにしゃがみ込んで俺を覗き込む。

「どこか怪我でもしましたか？」

「いいや。その、俺は誰なんだ……。」

「え？」

「ボーナスゲームで俺はアリスを助けることも考えていたが、自分が誰なのか必死に探していた。」

勝手に回る口にナイトメアも、トカゲも何も言わずに耳を傾ける。

「その答えは見つかるのか？」

泣きそうになる。

女の姿になってからはなんでか涙がでやすくなる。

トカゲが静かに視線をそらす。

「お前は知ってるんだろ？」

「……ええ。」

「俺はお前を傷つけたのか？」

「……。」

押し黙るトカゲのことに心が重くなる。

ずっと何かが乗り移ったように低い声で俺は、小さくつぶやく。

「俺は誰だ？」

何かが体から抜けて行って静かに膝をついた。  
そして、また……深い眠りに陥ったのだ。

「ハンプティィは言いました。どうして私は此処にいるのか？」

一人の少年の声。

「ダンプティィは言いました。何をするために俺は此処にいるのか？」

また同じような少年の声。

「ハンプティィを追いかけた少女。少女を追いかけたダンプティィ。」

知らない男の声。

「じゃ、ハンプティィは誰を追いかけたの？」

少年達の声が二重そうになって聞こえる。

「あの……いったい誰？」

目覚めたそばにいたのは瓜二つの顔とその間に挟まれた男の顔。  
俺の質問に三つの顔は笑顔を張り付けた。

「あんだこそ、誰？」

「誰？」

「俺は・・・ハンプティー・ダンプティーだ。」

「嘘はいけない。」

「いけないよ！」

男の言葉の後から繰り返す瓜二つの少年。  
なんかむかつく。

「俺は名乗った。そっちも名乗れ。」

男はダンスをするようにリズムよく近くのソファーへと腰を下ろした。

その両側に少年たちが腰を下ろす。

「俺様の名前はドード鳥のヴェルリオ・アインだ。」

「僕はトウートル・デイー。」

「僕はトウートル・ダム。」

「・・・で、ここは？」

あたりを見回す限りどこかの部屋の気がするけど・・・どこだ？  
そんな俺にヴェルは近づいてきて謎めいたことを話し始めた。

「少女はただ不安になる。自分がいる場所について。」

「此処はボリスの家だよ。」

「ボリスはいないけどね。」

何故三人でしゃべるのかよくわからない。  
でも、此処はボリスっていう人の家だってことは分かった。ならば……。

「ボリスって誰？」

「少女はまた質問をする。不安をかき消すために。」

「猫。」

「猫ちゃんだよ。」

「……説明になつてない。」

猫とだけ言われていてもよくわからない。

「道化の答えはこれまた道化で、少女はより一層不安になる。」

「だって、猫だもん。」

「うん、猫だもん。」

お互いの言葉をお互いに確認するデイーとダム。  
嘘じゃない……。でも、猫の家にしては大きくないか？

「ちょっと、なに勝手に上がり込んでるわけ？」

「猫はやってくる。噂をするとひょっこりと。」

とんとん拍子にしゃべるヴェルの先にいるのは、猫。ピンク色のパ  
ンクな恰好の猫。

「あ……猫。」

「いや、ボリスだから。」

「ボリスだよ！」

「ボリスなんだよ！」



第六話（後書き）

ヴェルはオリです

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4881v/>

---

地下国のゲーム

2011年12月25日01時52分発行